

◆ 新収蔵資料紹介（令和6年度6月）展示解説シート ◆

さんちゅう

「三中新聞ついに誕生」-創刊号 昭和22年6月20日発行-

会期：令和6年6月4日(火)～6月30日(日)

久留米市立六ツ門図書館展示コーナー

令和6年3月26日付けで故近藤重信氏の遺族より寄贈を受けた、「三中新聞」(久留米市立第三中学校発行)を初公開します。

重信氏は、昭和22年(1947)4月に、新制中学校として開設された第三中学校に、昭和23年(1948)から在学しました。「三中新聞」が発行された3年次は、文芸部に所属し、三中新聞編集部長を担っています。本資料は、昭和25年(1950)6月20日に、久留米市立第三中学校(現・櫛原中学校)で発行された学校新聞の創刊号です。

久留米市では、昭和22年(1947)4月に始まった新学制による六・三義務教育により、新制中学校として第一中学校～第六中学校までが開設されました。そのうち、第三中学校は、櫛原町(現・東櫛原町)の久留米商業高校内に開設され、4月16日に行われた開校式には、南薫・節原両校334名が入学しました。

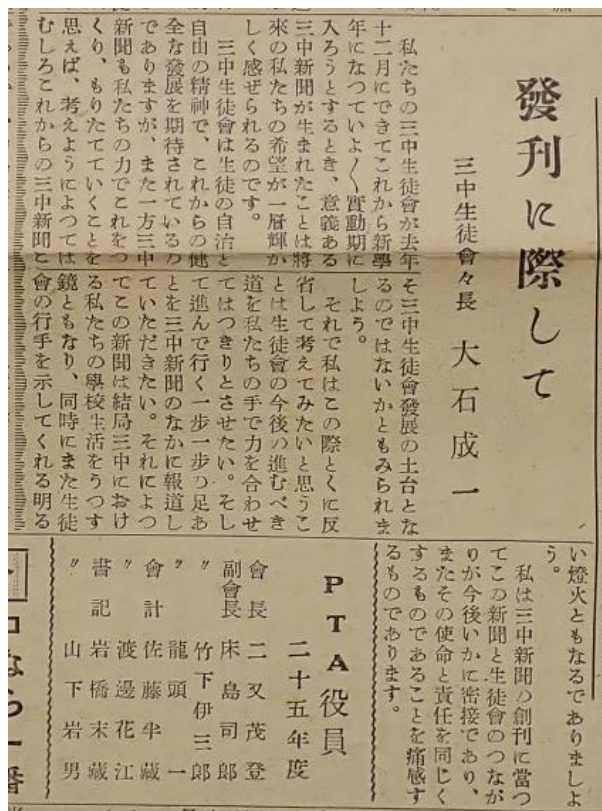
昭和26年(1951)4月1日に、第三中学校は櫛原中学校と改称されています。

紙面は、冒頭の学校長訓辞に始まり、部活動紹介や生徒の投稿記事の他、学校に伝わる七不思議、敷地内で発見された甕棺の紹介、修学旅行の思い出などで構成されています。

学校長による訓辞です。

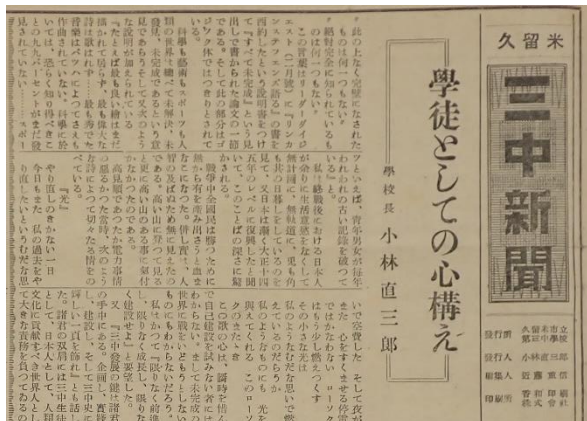
「私はかつて『限りなく前進し、限りなく成長し、限りなく建設せよ』と要望した。…現実を眺める傍観者ではなく、自ら舞台に上つて此の役割を果たすべきである…」と学生としての心構えを説いています。

末尾に、昭和22年(1947)に始まった三中における新聞発行史に触れ、3年の中断を経て発行された三中新聞への期待と喜びが綴られています。



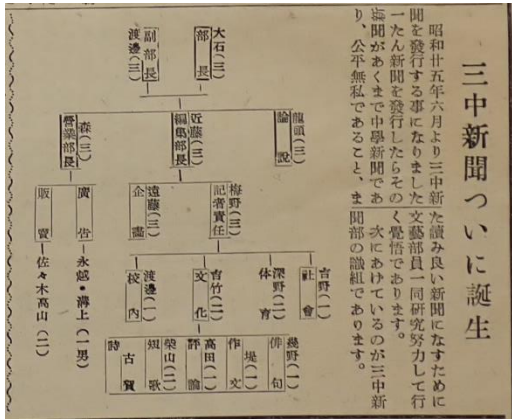
●「発刊に際して」

前年の生徒会発足に引き続き、三中新聞が発刊されたことに対する生徒会会長の寄稿文です。「生徒会の進むべき道を私たちの手で力を合わせ…進んで行く一步一步を三中新聞の中に報道し…」と語り、三中新聞の果たす役割を「学校生活を写す鏡」「生徒会の行く手を示してくれる明るい燈火ともなる」と期待しています。



●「生徒としての心構え」

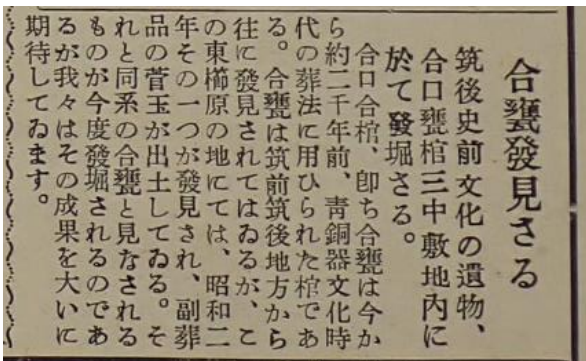
●「三中新聞ついに誕生」



昭和廿五年六月より三中新た読み良い新聞になすために一たん新聞を發行しなりました。文藝部員一同研究努力して行く。公平無私であること、ま聞部の組織であります。

新聞発行にあたり、「新聞はあくまで中學新聞であり、公平無私であること……部員一同研究努力して行く」との覚悟が綴られています。

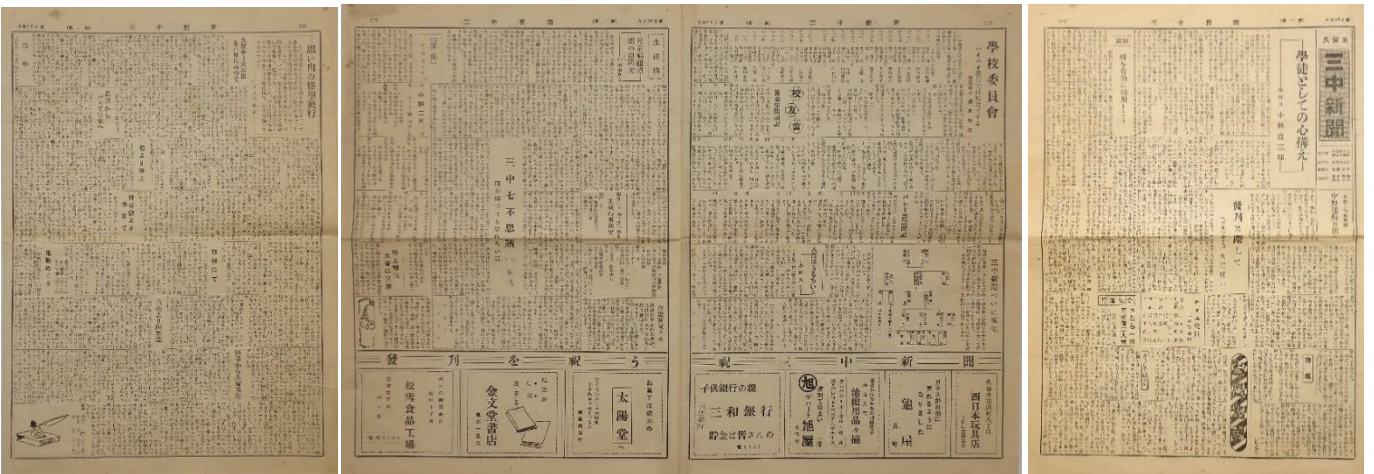
●「合甕発見さる」



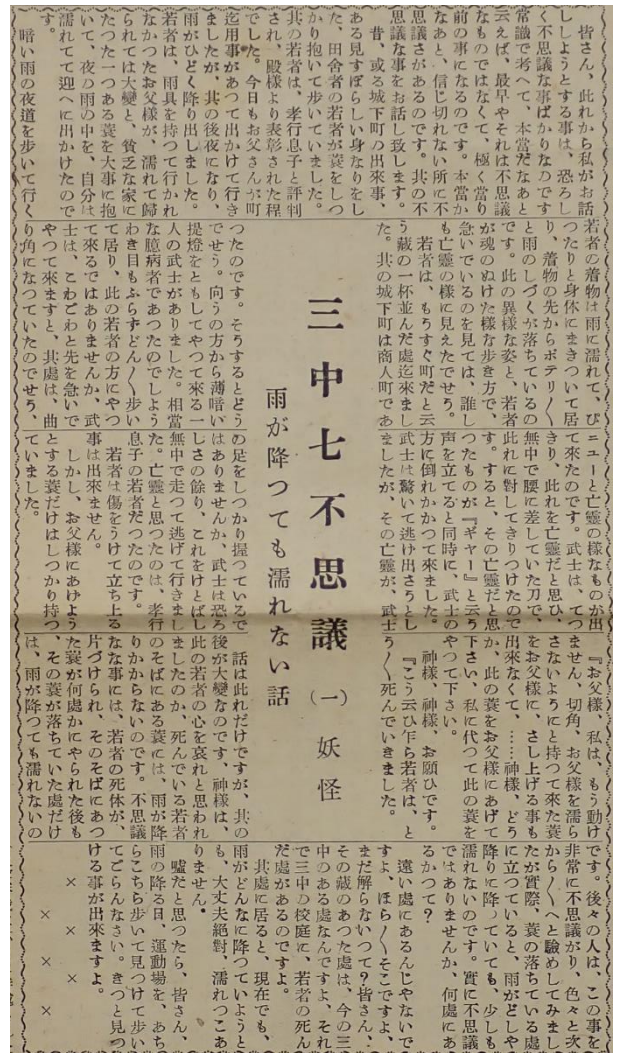
筑後史前文化の遺物、合口甕棺三中敷地内に於て發掘さる。合口甕棺、即ち合甕は今から約二千年前、青銅器文化時代の葬法に用ひられた棺である。合甕は筑前筑後地方から往に發見されてはゐるが、この東櫛原の地にては、昭和二年その一つが發見され、副葬品の管玉が出土してゐる。それが同系の合甕と見なされるものが今度發掘されるのであるが我々はその成果を大いに期待してゐます。

三中の敷地内で発掘された合口甕棺を紹介しています。記事によれば、昭和2年(1927)にも東櫛原の地で副葬品の管玉とともに甕棺が発見されたとあります。その後、櫛原中学校の校舎建替えの際にも、弥生時代の住居跡などが発見され、「東櫛原今寺遺跡」として久留米市の史跡に指定(昭和53年6月24日)されています。

●三中新聞(第一號) 右から1面、2面、3面、4面



●「三中七不思議(一)妖怪」



久留米城下町で起った昔話です。雨の中、父親に蓑を届けようとした若者が、一人の武士に、亡霊と間違われ切り付けられて亡くなります。その間に、「蓑だけは父に届けて」と神様にお願いしたといひます。不思議なことに、その地は雨に濡れることが無いと言ひ伝えられ、その場所は三中の校庭にあると紹介しています。